広告

企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

伝統工芸・桐下駄×革製品を融合し 日本の美を表現する

村上 モリロー　香川県／アートディレクター

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。香川県選出の匠、アートディレクター・村上モリローさんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

エリア・コンサルティングで来県した生駒氏（左）

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

デザインを香川の力に変える

村上さんが桐下駄と革製品のコラボを考えた原点は、自身のライフワークである「デザインを香川の力に変える」。さぬき市志度の桐下駄は、磨きから成型まで手仕事にこだわる伝統工芸だが、生産者が激減。さらに後継者が育たず、伝統を守るのが難しくなっている。

作品をプレゼンする村上さん

プロダクトを紹介する村上さん

デザインがすばらしい、かっこいい桐下駄を作ったら？」というストレートな言葉。その後、桐下駄や革の歴史、性質、和装、日本の美などをもう一度勉強し直し、十数点の試作品を制作。履いているときはもちろん、桐下駄を脱ぎ、そろえたときにも美しさが心に残るプロダクト「ZAN－SHIN（残心）」2作品が出来上がった。

地域の特性を作品に盛り込む

作品「MATSU」のモチーフは高松の特産品の松、「OHGI」は屋島の源平合戦で、那須与一が扇の的を射たことから。「MATSU」は足元がかわいらしく見えるので、女性向けとして制作したが、男性が履いても〝かっこいい〟ということで、男性向けも制作する予定だ。「今回のプロジェクトでは、純粋にデザインを追求するという原点を思い出した。地元の職人たちのDNAが存分に詰まった『残心』の今夏発売に向け、頑張っていきたい」と意気込む。

〝匠〟とのつながりが財産

プロジェクトの香川県代表として参加し、全国52人の中から5人の「注目の匠」に選ばれた村上さん。「無事に終わって、正直ホッとした。自分の作りたい作品をプレゼンし、同年代のサポートメンバーの清川氏からデザインやコンセプトを評価していただいたことは、自分の考えが間違ってなかったと思えて、今後の活動に向けて自信になった」と振り返る。

本職はアートディレクター。普段は、企業や商品をブランディングする仕組みや戦略を中心に考えることが多い。「〝仕組み〟や〝戦略〟を考えるのも、もちろん大切。しかし、今回のプロジェクトを通じて、純粋に『いいね！』『かわいい』と思えるものをデザインしたときの感動を思い出した。デザイナーとして、デザインとの向き合い方が変わった気がする」。

プロジェクトで得たもう一つの財産は、全国から選出された〝匠〟とのつながり。フェイスブックで交流した り、上京した際は打ち上げの幹事を務め、参加した〝匠〟たちと熱く語り合うなど、大いに刺激を受けたという。「何年か先に、みんなで一緒に何かを創り出していこうという雰囲気が盛り上がっている」と目を輝かせる。

村上 モリロー
香川県／アートディレクター

1978年香川県高松市生まれ。企業や商品のブランディングデザインを手がける傍ら、2013年高松工芸高校出身者を中心としたクリエイター集団「瀬ト内工芸ズ。」を発足。瀬戸内の特色を活かした商品を企画、販売。地元にクリエイティブの価値を発信し続けている。「瀬戸内国際芸術祭2016」にアーティストとして参加し、盆栽をテーマにした「feel feel BONSAI」を発表。

デザインを考える村上さん

完成プロダクト「ZAN-SHIN（残心）」の「MATSU」

今夏の発売に向け制作に全力

香川で生まれ育ち、一度県外に出て、24歳の時に帰郷した。学生時代は「なにもなく面白くないところだ」と思っていたが、戻ってみると、瀬戸内の多島美や日本一小さい県ならではの人の「近さ」に魅力を感じ、香川で働こうと決めた。

今回の作品「残心」は地元の桐下駄職人と家具職人、クラフト作家が制作に加わった、まさに〝メイドイン讃岐〟。「注目の匠に選ばれたことは、みんな喜んでくれた。デザイナーは人と人をつなげる役割もある。地元の人がつながり、何かを生み出すことで地域貢献ができたらと思う」。

「残心」の今夏発売に向け、本格的に動き出した村上さん。次の目標は「残心」のコンセプト「美しい所作の継続」を踏襲した新たな作品づくりだ。「品質のいい桐が夏に入荷されるので、まずは『残心』の2作品の制作に全力を挙げて取り組みたい。これをきっかけに、活動の幅を広げ、全国、世界に向けて挑戦していきたい」。可能性は無限に広がっている。

村上さんがデザインした作品

村上さんのオフィスからは瀬戸の美しい海が見える

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT